

「d-Witz」 携帯大喜利型宿題配信・例文復習システム

総合政策学部1年 遠藤 忍

1. 教材の概要

今回考えたものは、携帯電話のメールに「お題」を配信することを中心とした、学習表現の復習と独語作文の力を養うための教材展開案です。

平たく言えば、「大喜利」をIT教材に取り入れたものです。履修者の携帯電話に「お題」を配信し、履修者には学習言語で答えてもらいます。提出された答えは、授業内、あるいはWebページで紹介します。「お題」は各課の学習内容に即したもので、解答には学習した文法・表現を使うことを課します。「お題」は、教員・運用者だけでなく、履修者からも募集します。

メールでの定期配信により学習のペース作りを促すことができ、「お題」に解答することで文法・表現の定着が期待できます。また、出された答えがそのまま例文となるため、それらを見ることでも文法・表現の理解が深まります。さらに、履修者が考えた「お題」に履修者が答えることで教材にインタラクションが生まれます。

2. 教材のコンセプト

今回作成した教材は、以下のような私自身の考え・ポイントを強く反映しました。

- ・通学途中や家の中など、どこにいても手軽に取り組める教材が良い
- ・「面白い」「ウケる」例文は頭に残りやすい
 - 私自身が過去の言語学習において「面白い」と感じることで上達したと思う
- ・携帯メールによる学習効果は高い、という実証がある
 - 外国のとある学校の落ちこぼれクラスの担任が宿題を携帯メールで配信したところ、飛躍的に成績が上がったらしい（NTV・世界仰天ニュース）
- ・10分間テストの対策のために文法事項は特に復習したい
- ・多くの例文に触れる・書くことで文法事項を深く理解することができる
- ・学習者自身が教材づくりをすることで、その学習者の学習効果が高まる
 - 高校時代、定期テスト予想問題の出し合いっここがかなり学習に効果的だった

3. 教材の対象

今回の教材は、対象をSFCドイツ語のインテンシブ1後半以上とし、特にインテンシブ2での利用を想定しています。

利用者の想定レベルを「インテンシブ1の後半以降、特にインテンシブ2」とした最大の理由は、それ以前のレベルで学習した表現を用いて「ボケ」ることが非常に困難であると考えたからです。たとえば、ドイツ語インテンシブ1の第1課は自己紹介についてですが、名前と出身地の表現でネタを考えることは、かなり高度な笑いのセンスを要求します。

インテンシブ2になると、比較表現や手紙文、英語で言う仮定法の表現など多くの表現を学び、同時に語彙力も発展してくることから、多種多様な「ボケ」をつくり出すことのできるレベルに達していると言えます。

6. 使用するシステムの紹介

今回のアイデアを具現化するにあたり、2つのフリーソースのWebプログラムを利用しました。その2つについて説明します。

<メルマガ独自配信システム>

<http://www.netmania.jp>

- ・特定のWebサービスを使わずにメルマガジンが配信できる
 - ・テンプレートをいくつか登録しておける
 - ・登録・解除用フォームをホームページに設置でき、簡単に登録・解除ができる
- 管理画面サンプル：<http://d.enshino.biz/witz/g2/admin.cgi> [Pass：modelle]

<Blogn Plus>

<http://www.blogn.org/>

- ・PHPで動くから動作が軽快、設置が簡単
- ・他のブログシステムと、記事データの管理上互換性がある
- ・ページデザインのテンプレートを簡単に記述できるので、自由度が高い
- ・複数人のアカウントを管理できる
- ・予約投稿やメールによる投稿が可能

サンプルページ：<http://d.enshino.biz/witz/>

管理画面サンプル：<http://d.enshino.biz/witz/admin.php> [ID：d-witz Pass：modelle]

なお、送られてきた解答の管理は、普通のメールソフトで行います。答え投稿用のメールアドレスを新たに設置し、メールソフト等の受信設定をして管理します。答えメールを送信したときのメールの自動配信は、私のサーバー上で設定しています。本当に自動返信されるかを実験したい場合には、witz-g2@d.enshino.bizにメールを送ってみてください。

7. 教材の課題

今回は、あえてこの教材の欠点を明記しておきたいと思います。欠点は、今後改善せねばならない課題として考えたいからです。

授業活性化支援か、自律学習支援か

今回の教材作りに当たっては、授業の中で取り扱うこと・自主学习教材として取り扱うことの2つの事例を想定したつもりでいました。しかし、どちらをメインで運用するとしても他方にデメリットが生じることに気がきました。

授業中で扱うことをメインとすると、「宿題」という位置づけが強くなり、履修者の自立性を阻害する可能性があります。反面、自主学习教材で運用するとしても、どれだけの履修者が興味を持って答えを送信してくるかはあまり期待できません。

運用が煩雑である

今回はフリーソースのプログラムを使ったため、メルマガ配信、解答管理、ブログ投稿の3つのシステムがすべて独立した形になりました。なので、運用に当たっての作業数が多くなり、結果的に煩雑になってしまう恐れがあります。

それにも増して、毎週お題を考え、送られてきた答えをピックアップし、授業中に解説する、という作業は、先生に対して負担を強いることになるとも考えられます。

ヨーロッパ言語以外への転用が難しい

携帯電話で運用する場合、非常に範囲が限定されると考えます。なぜなら、日本の携帯電話で入力できる文字種が日本語とアルファベットに限定されるため、これらの文字を使用しない言語は利用対象から外れます。また特殊文字、例えばウムラウトを使用する言語では、代替文字の利用を促さねばなりません。そう考えると、ヨーロッパ言語に特化した教材となると言えます。

8. 余談

ネーミングの由来

d-Witzの由来ですが、「d-」の部分はドイツ語教材開発研究プロジェクトにおいて作られた最近の教材に、頻繁に使われるので使ってみました。また「Witz」はドイツ語で、ジョーク・冗談という意味で使われているため、「大喜利にぴったり」と思いつけました。

アイデアの元ネタ

今回、「携帯大喜利」という形式を採用した背景には、2つの「元ネタ」が存在します。

携帯電話のメールで宿題を配信するというアイデアは、すでにコンセプトでも紹介した、「世界仰天ニュース」という番組で紹介されていた海外の事例からヒントを得ました。どうしようもないほど成績の悪かったクラスが、携帯メールでの宿題を通じて全員が宿題に取り組むようになり、結果成績が上がった、という事例です。

また、携帯電話で大喜利をやるうというアイデアは、NHKの「着信御礼！ケータイ大喜利」という番組からヒントを得ました。